
戦火の果てに

リオ・レウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦火の果てに

【NZコード】

N9168D

【作者名】

リオ・レウス

【あらすじ】

世界の4分の一が今、魔王の手に落ちた。悲しき運命、人間の時代も終わりを告げようとしたそのとき、古い予言にある『時の勇者』が現れる。勇者は予言に従い、魔軍にくらいくが……？？

プロローグ～魔王の部屋にて（前書き）

はじめは魔王の部屋から……

プロローグ～魔王の部屋にて

魔王がいきなり起きた。

どうやら城の玉座で眠ってしまったらしい。

しかし、いつものような真っ昼間ではない。

朝の日差しがまぶしい。

朝！？俺様、朝は初めて！！

今日はやけに目覚めがよかつたな…

気分がいい！！

フフフ…こんな日には何かいいことがありそうだな…

とその時、玉座の間のドアがたたかれ、外から声がした。

「魔王様、報告にいざります。」

フッ…早速よい知らせか？…やはり今日はいい日だ。

魔王はいつものような威厳のある声で答えた。

「入れ。」

しかし、魔王の予想は大きく外れた。

入ってきたのは魔王宮の重臣ワイズ。

ワイズは青ざめた顔で魔王に報告を告げた。

「魔王さま…大変です…！勇者が2人の仲間と50人ほどの兵を連れて、西端の砦を占拠しました…！」

なぬう！？

西端の皆だとお！？

「西端の皆の守りについていたサバロのヤツは何をしていたのじゃ？？」

サバロはとても有能な部下だ。

そういうの判断力で、数々の種族を征服し、その実力は皆が知っている。

しかもサバロには200人ほどの魔兵をわたしておいたハズだった。たかが人間の兵相手に何をやっているんだ？？

全く…後少しで世界を俺様の手に入れられるというのに…

「サバロ様は勇者にやられたとの報告が入っております。何でも勇者と仲間の2人は相当の腕だと聞いております。」

くそ…？なんて事だ！？人間共め、こざかしい！！

この世界は今、荒れに荒れていて、そして乱れている。

事の発端は俺様。

俺様がこの世界を征服してやろうと心に決めたのは5歳。

それ以来、俺様は世界を征服するために努力してきた。

そして俺様はついに魔王という地位を手に入れたのだ！！！

俺様は魔王という地位を生かして自ら魔軍を指揮し、この世界を縦横矛盾に駆けめぐった。

数々の種族を滅ぼし、やつと世界の4分の1を手に入れた。残すは西の端の国、ラモール。

ラモールは古くから栄え、人間が他の侵略から守り抜いてきた地。

だが、もうじき墮とす。この俺様の手で！－！
それだけ……それだけのハズだったのに……

くそーーこのいかれ勇者メ！－！－！

まあいい、俺様が本気を出せばこいつもひねりつぶせる。

「こ」は俺様の器量を見つけてやろう。

「まあよい。放つておけ。そんなヤツなど、いつでもこの魔王がひねりつぶしてくれよー。」
「ハハッ！かしこまりました。」

そう返事をしてワイヤーズは出て行った。

ホントに……ダイジョブ……だよな……？？

STAGE 1・時の勇者

人間とは滅び行く存在なのだろうか……？

俺は時々こんなことを考えてしまつ。

今、魔王の手でこの世界の4分の3は支配されている。

『君がデルタ・レフ・スティファ君じゃな？君は時に選ばれた。』

君は古い予言にある時の勇者。

西の町のはずれに住む賢者アナテイスは俺にそう告げた。

俺が9歳の時の話だ。

その日から、俺は魔王に立ち向かう宿命を背負つた。

俺は選ばれた人間なんだ……

14歳の時、俺は旅に出た。

……と言うより、かるく家出に近いもんだけど。
でもそのおかげですばらしい仲間と出会つた。

一人目、俺より2つ年下のネネ。

見かけはカワいい女の子だけど、ナイフの達人。
ちょっとおてんばな性格で、言いたいことを何でも言つ。
暗殺者のような技術を持ち、戦闘の時はちょっとコワイ。
以前は孤児の流れ者で、村人を襲つては金目の物を略奪していた。
でも俺にやたら絡んできて、ついてきちまつた。

そしてもう一人、俺よりかなり年上のライア・アスクマン。

魔王の軍と戦つた兵の生き残りでほかの兵は全滅したらしい。
ライナーとは西の洞窟で会つた。

魔軍から逃げて来たところを助けて、仲間になつた。

考えが古い！！あんまり好かないな。

でもこの人、かなりの剣術の達人で、実は俺に剣術を仕込んだのも
この人……

それに魔術？ だっけ？ そんなのも少し使って、知識が豊富！
でも歳だから少し慎重すぎるけどね……

それから俺は2人と一緒に過ごした。

ただ過ごすだけで楽しかつた。

まさか魔王の手がすぐそこに迫つて いるなんて考えられないくらい
に。

でも、ただただ平和に暮らすことは許されない。

俺は選ばれたんだ。

時の勇者に……

そしてついに今夜、歴史が動くんだ。

いや、俺が動かす！！動かしてみせる！！
この世界を変えてやるんだ。

黒雲の立ちこめるこの天気、奇襲にはもつてこい！！
神は我らがともにあり！！

絶対に成功させてみせる！！成功させなくちゃイケナイ。

自分の心にそう言い聞かせて、勇者デルタは自分に渴をいれ
た。

デルタ達は西端の階に向かつて歩いていた。

50人ほどの兵、そして一人の仲間^{つわもの}を連れて……

世界に平和をもたらす！！

それが俺、時の勇者の使命！！！

STAGE 1 + サバロ（前書き）

サバロ・皆の守りについている魔軍の指令官

STAGE 1 + サバロ

夜。サバロは西の階から空を見上げていた。
となりには黒い竜が体を丸め、静かに眠っている。

「なんだ? この胸騒ぎは……何が原因だ!? ……」

『西端の黒雷』の異名を持つサバロは胸騒ぎを感じていた。
黒い雲が空を覆い、月は見えない。星もない。やけに暗い夜。

いやな予感……

下の通路では、巡邏の魔兵が徘徊している。

奴らには自我はない。ただただ任務をまつとつする忠実なしもべ。
命令されれば何でもする残虐な兵士。

奴らは哀れな存在だ。命令を拒む権利も、自分を尊重する意志もない。

しかし、こいつは兵が我々に必要なのも、事実だろ?。

魔王様は偉大だ。

生命を造り出す、それは誰もがなしえなかつた偉業。
そしてその命を自由に造り替える……
まさに世界を支配するにふさわしいお方だ。

この私もまた、魔王様が造られた一つの生命なのだから。

私は意味を持つて魔王様に造られた。
何としても期待に報いらなければ。
早く人間共を一掃しなければ!!

サバロには正直焦りが生じていた。

西の国ラモールを奪い取る、これが魔王がサバロに与えた使命。

はじめサバロは、この人間の地など半年ほどで墮とせると想定していた。

しかし侵略はそう簡単でにはいかなかつた。

西の砦、西の洞窟と、魔王勢は快進撃だつたが、その後の人間にによる半ゲリラ的な戦法により、進軍を阻まれていた。

それからというもの、この砦はたびたび人間の夜襲に遭つていた。

くそ！人間共め！無駄な抵抗などしあつてえ……

ふと、一瞬雲の隙間から月光がのぞいた。

一瞬だが、月光は夜の岩肌を照らし出した。

「んー？」

そのとき、サバロの目には何かが映つていた。
皆のすぐ下の崖、何かがうごいた！！

敵襲か？？

とつぞにサバロは耳を澄ました。

魔王がサバロに与えた能力。

それは、異常なまでの感覚。

五感はもちろらんのこと、さらに第六感ともわれる【感】までもが特化している。

サバロはありつたけの氣力を耳に集中した。

人間の足音。

10?…いや、20?…いやいや、50はいる。

人間共め、たかが50人程度で何ができる!?
愚かな!…ふざけおつて!このサバロ様がひねりつぶしてくれよう!

サバロは黒く大きな竜にまたがり、砦から暗雲の中へ飛び立つた。

竜の不気味な鳴き声が夜の暗雲のなかに消えた。

さて…どうやって遊んでやるつか……?

勇者『テルタはいきなり歩みを止めた。

「ちゅうじゅー急に止まんないでよーびつべつあるじやないー。」

ネネが後ろからデルタをどつく。

「しつ。静かに…今何か音がした…耳を澄まして!」

「音?……」

ネネも耳を澄ました。

バサツバサツバサツ：

羽ではばたく音が聞こえる。

アヌカマシが「うーん。うーん」とうなづいていた。

この羽音の正体を知つていいようだ。

突然、耳をつんざくよつたな咆吼が空から降ってきた。

ギイヤオオ！！

「空だ！…敵は空だあ…！」

後ろからついてきた兵の一人が空を指さして叫んだ。

「空…？」

とつをにデルタは空に視線を移す。
そこには竜が舞っていた。

西の砦付近には昔から竜が住み着いている。
こんな時に会うとは…全く運が悪い…
デルタは剣を抜いた。

ギィヤオオ…！

巨大な竜がもう一度吼える。
兵達は恐れをなして逃げ散つた。
残つたのはデルタとネネ、アスクマンの3人だけだった。
竜はまつすぐデルタ達を見すえている。

「！」のヤローー！アタシがぶつ殺してやるわ…！」

ネネが腰のベルトからナイフを抜き出し構えた。

「やめろネネ！ヤツは強すぎる…！お前もいつたん退け…！」

デルタがとつをに叫ぶが、ネネの耳にはとどかない。
ネネは完全に戦闘モードに入っている。

「死になあ…！」

ネネが思いつき竜を投げる。

「ピコカウー！」

ナイフは一直線に竜の胸に突き刺さった。

「まだまだあーーー！」

ネネはまたナイフを続けざまに投げた。

ねらいは正確、二つのナイフは竜の頭に刺さった。

ギヤアアオーーー！

竜が苦痛のためきを上げる。

あまりの激痛に竜は空から墜落した。

竜は地に落ちてもまだ痛みにのたうり回っている。

それを見て取つたデルタは素早く竜に近づき、剣を構えた。

「つおりやあああーーー！」

デルタの剣の切つ先が竜の首を断ち切つた。

竜はあっけなく力尽きた。

「ケツ……みんな逃げ切まつたよ……」

デルタは辺りを見回しながらつぶやいた。

周囲には自分、ナイフを構えたネネ、そして頭の影に隠れていたアスクマンを見ているアスクマン。

……まったく、アスクマンさん、何やつてんの？

デルタの視線に気付いたのか、アスクマンが苦悶から出でて言つた。

「…………ふつ……ただの竜でよかつた。」

「え？ 何が？」

デルタは聞き返した。

ただの竜？？ただの竜のほかに何がいるといつのか？？

「確かに、俺が西の洞窟で魔軍と戦つたとき、先頭で指揮をとつていたヤツは黒い竜に乗つていたんだ……その竜だと思つた……」

そうか、敵は竜使いか。

楽しくなりそう……

デルタは内心、わくわくするのであつた。

STAGE 3・魔兵遭遇

ふむ……あの竜を倒すとは……なかなかやるよつだな……

サバロは上空から竜にまたがり、デルタ達の戦闘をながめていた。大事な戦力の竜を一頭失ったのは残念だが成果もなかつたわけではない。

何より、ヤツらの戦力を見事に粉碎した。

見ると侵入者は3人のみになつてゐる。

さつきの戦闘で大概のヤツらは逃げ散つた。
遊びやすくなつたというものだ。

次は何を仕掛けでやるうか……なかなか楽しみだな……

と、その時サバロの目におもしろいことが映つた。

侵入者達の進む道の先には、巡邏の魔兵がいた。

このまま進めば間違いなく勇者達は魔兵とはち合わせになるだろう。

「これはおもしろくなりそうだ……！」

サバロは不敵な笑みを浮かべた。

こちらはところ変わつてデルタ一行。

先ほどの竜との戦闘は幸運だった。

しかし相手は人間を本気で滅ぼそうとしているヤツらだ。
無傷の戦闘など、これからは望めないだろ？

「なんか楽勝だったね？でもほとんどうたたかたの手柄だかんね？？」
ルタの役目は後始末」

「ネネが後ろで『ルタをばかしている。
さつきからずつとこの調子だ。

「はいはい、分かったよ

『ルタはめんぢくせそつにながす。

全く……なんなんだ？ **〔コイツ〕**
ネネは……
なにかつて俺のことちやかす……

と、そこにアスクマンが話しかけてきた。

「おい、何かいるか？……あそこ……」

アスクマンの指さす先……

3つの人影が目に入る。

ふと、向こうもこっちの存在に気付いた。

と同時に3つの影が奇声を上げた。

魔兵だ！！

ルタが真っ先に影の正体に気付いた。

一瞬遅れてアスクンが、そしてネネが気付く。

魔兵の一人がダッシュした。

ここからは……300メートルほどだろうか？
どんなに早くてもあそこから30秒はかかるだろ？

3人は各自の武器を構えた。

「コロス、シンニコウシャ、コロス！！」

魔兵の一人が片言でしゃべった。
ソイツはすでに100メートルほどに迫っている。
かなり早い。

なんだ？ この早さは…？

「シネ…シネ…」

魔兵は50メートルほどに迫ると、いきなり跳躍した。
かなりの高さに。

魔兵はねらいを一点に定める。

口の端がつり上がり、笑つても見えるその顔。
不気味で、そして悲しい表情。

魔兵は空中で片刃の大剣を引き抜いた。

魔兵特有の戦闘フォーム。

空中からの攻撃。

そしてその剣の重さからくる強大な威力。
魔王の最高傑作といえよ？

魔兵の振り下ろした剣とデルタの剣とがまじわる。

ガキイインー！

火花が散った。

デルタは魔兵の剣をからつじて受け止めていた。手がしごれている。

なんて……力なんだ……？

剣と剣の間から魔兵の顔が見える。

とても不気味な顔。

魔兵が口の端をせりてつり上げて何かをささやいた。

「オマエ、シヌ、ココト……」

その低く不気味な声にデルタは背筋に寒気が走った。とたん魔兵の剣にかなりの力が加わった。

なに？？いつたい何なんだ？？「コイツ…………！」

手から剣の感触がなくなつた。

もうすでにデルタの手には何も握られていない。

け、剣をはじかれた！？

「カカカツ、オワリダ、」

魔兵が笑いながらつぶやいて剣を構えた。

STAGE 4：力のカタチ

「口…ス…」

魔兵が素早く剣を振り上げる。

デルタは目をつむった。

しかし、斬撃はおとずれなかつた。

デルタのすぐ近くに魔兵の剣が音を立てて落ちた。

魔兵の右腕にはナイフが刺さつている。

ネネのナイフだ……

ネネが新たにナイフを3本続けて投げた。

勢いよく飛んだナイフは、そのまま魔兵の両目、そして脳天に深く突き刺さつた。

紫色の血が飛び散る。

魔兵はその場で倒れ、動かなくなつた。

ネネがこちらに向かつて微笑んだ。

またアイツに貸しをつくつてしまつた……

俺を馬鹿にする材料をアイツに与えてしまつたと言つことだ。しかし安堵もつかの間、微笑むネネの背後に黒い影が見えた。

二人目の魔兵。

「あぶねえぞネネ！－後ろだ！」

デルタが大声で叫ぶ。

後ろを振り向いたネネの表情が一瞬で恐怖に変わった。
いきなりネネの後ろの魔兵が悲鳴を上げた。

なんだ！？

魔兵は大きな緑色の炎に包まれている。

「タスケ… デグレエ… ！！」

魔兵はしきりにやつ語ぶ。

「コイツは私に任せろ！！」

アスクマンがそう言った。

何か呪文を唱えている。

すげえ！！

「……大地よ、我に力を！！アースブレイク！」

గుగుగుగుగుగుగు.....!!

地面が揺れ出す。

突然大地が盛り上がり、土が渦巻き始めた。

土の竜はうねりを上げ魔兵に襲いかかつた。

魔兵はそのまま土の竜に飲み込まれ、地面に吸い込まれた。

3人目……そう……魔兵は3人いたはずだ。
もう一人、どこかに潜んでいる……

デルタは急いで辺りを見渡す。

……！……！

デルタは後ろに殺氣を感じ取った。

デルタは瞬時に剣を抜き、振り向くことなく後ろに剣を突き立てる。

グサッ！

手応えアリ！

剣は背後の魔兵に深々と刺さった。

魔兵の体液が剣を伝つてしたたる。

デルタは刺さつた剣を勢いよく引き抜き、振り向きざまに首を切りとばした。

首は宙を舞い、弧を描いて地面に落ちた。

そしてワンテンポ遅れて胴体も地面に倒れた。

「……ケツ……せっかく買ったマントが台無しだ……」

デルタは紫色に染まつたマントを見つめながらつぶやいた。

STAGE 5・決戦

サバロは大きな斧をおろした。

今、サバロの足下には数多の死体が横たわっていた。

所詮こんなものだ。

人間ごときの力などたががしれている。

人間達を野放しにしていても何もできはしないだろう。

強大な我が軍の前には人間など無力。

：なぜ魔王様が我々に人間の殲滅を命令されたのか。
今になつてもわからない。

サバロは3匹の魔兵が勇者に向かつて走り出すのを見届けてから、
その場から立ち去つた。

楽しい遊びをするにはまず邪魔者を排除しなければならない。

少なくとも彼はそういう主義を持っていた。

傷ついた勇者達をこの手でひねりつぶす。

邪魔は好ましくない。

竜との戦闘のときに逃げ散つた人間共をたたきつぶす必要がある。

サバロが思念にふけつているその瞬間でも彼の手は動きを止めない。
次々と襲いかかる人間共が悲鳴を上げ、大斧によつて切り刻まれる。

次は勇者に何を仕掛けようか…

サバロは襲いかかる人間共など気にせずに次の手を考えているのだ

つた。

さて、こちらは所変わつてデルタ一行。
デルタはすつと汚れたマントを見つめていた。

せつかく買ったマント。

初めて買ったマント。

そして今、目の前にある紫色に染まつたマント。

まったく、今日はついてない。

もつと離れてから反撃すればよかつた。

そのとき、前を歩いていたアスクマンが歩を止めた。

「人の悲鳴が聞こえた。」

「え？ 悲鳴？？」

デルタも耳を澄ました。

ギヤアアアア……

風に乗つて悲鳴が聞こえた。

「あつちだ。」

デルタは進行を変えた。

岩山の方向へ歩いている。

キヤアアアア……

また聞こえた。
なんなんだ？？

「行こうーー！」

デルタは走り出した。

その後をネネ、アスクマンが続く。

しばらく走ったところで、近から悲鳴が上がった。

ギヤアアー！！

かなり近い。

デルタは周りを警戒しながら静かに辺りを見回す。

……いた。

岩山の影の部分、暗いところにかすかだが人影が見えた。

その影がこちらに気付いた。

振り向いた影の目は、黄色く、不気味に光っていた。

魔兵のそれなど比べものにならないほどの殺気が立ちこめる。
その人影は大斧を構えた。

「来るーー！」

デルタは短く言った。

サバロは予想外の展開に少し困惑していた。
目の前には勇者達がいたのだ。

くそ。見つかったか。

しかしサバロは素早く行動に移った。
過去の思念を捨て、臨機応変に対応する。
それは司令官に求められる絶対条件。

さて、勇者ヨイツラで何して遊ぼうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9168d/>

戦火の果てに

2010年10月10日03時21分発行